“小さな群れよ、恐れるな。あなたの父はよろこんで神の国をくださる”（ルカ１２－２３）

小さな群れ

カトリック美唄教会
２０２２年７月　No.302
２０２２年６月２６日発行

7 月 1 日 17 世紀福者ペトロ岐部司祭と 187 殉教者を祝います。

ペトロ岐部と 187 殉教者は、1603 年から 1639 年にかけて殉教した日本人である。日本各地を代表しており、社会的立場も司祭、武士、商人、家族、女性、障がいのある人、子どもと多岐にわたっている。188 人のうち、司祭が 4 人、修道者 1 人、他の 183 人は信徒であり、徳川幕府時代の厳しい迫害にもかかわらず、いのちをささげることによって信仰を証しした。地域別にみて、人数が多いのは京都のヨハネ橋本太兵衛をはじめとする 52 名と、米沢のルイス甘糟右衛門ら 53 名である。 また、生月の西一家、京都の橋本一家、加賀山・小笠原一族、島原の内堀一家は、家族が信仰のきずなで結ばれ、励まし合い、支えあって殉教していった。

ペトロ岐部は「世界を歩いた神父」として知られている。確かにその生涯は旅であった。だが彼をその旅に駆り立てた力は、神と同胞に対する愛のほかにない。ペトロは司祭となって帰国し、迫害に苦しむ日本の教会のために自分を与え尽くすことを熱望した。

ペトロ岐部は、1587 年、豊後の国 国東半島の岐部に生まれ、少年時代は有馬のセミナリオで育てられた。その時イエズス会に入会する私的な誓願を立てたという。後に同宿になったペトロは、1614 年、宣教師とともにマカオに追放された。だがそこでは彼の意に反し、司祭への道も閉ざされたと思われた。神と同胞に尽くしたいとの耐え難い望みに駆られ、ペトロ岐部は、1618 年ころ、マカオを出奔し、インドのゴアまで行った。そこから現在のパキスタン、イラン、イラク、ヨルダンなどを横断した。ことばも風俗も知らず、砂漠の生活になれない者の一人旅は、生死をかけた決死行である。エルサレムに立ち寄って聖地巡礼をした後、彼がローマにたどり着いたのは、1620 年であったと思われる。

ペトロ岐部は、ようやくの思いでローマのイエズス会の修練院を訪ねたが、非情にも、彼を受け入れないようにとの回状が、すでにマカオから届いていたことを知る由もなかった。

しかしペトロ岐部に会ったイエズス会の長上たちは、彼の司祭叙階に便宜を計った。1620 年、司祭に叙階されてすぐ、イエズス会への入会が許された。リスボンに移って誓願を立てたペトロは、帰国の途についた。交易船を利用して日本に上陸しようと考えたが、マカオ、アユタヤ、マニラとも、そのとき、すでに鎖国の日本との貿易を打ち切っていた。それでもペトロ岐部は帰国を断念することなく、1630 年、ついに薩摩の坊津に上陸することができた。リスボンを出帆してから、8 年の歳月が流れていた。　潜伏期の彼の心情をよく表す一つのエピソードが、マカオのコレジオの院長マヌエル・ディアスの手紙に記されている。1633 年、中浦ジュリアンたちの殉教の時、岐部神父は長崎の山中に潜伏していた。フェレイラが背教したと聞いて、夜中、山から下りて町に入り、フェレイラに会って次のように励ました。「神父様、一緒に奉行所へ参りましょう。あなたは背教を取り消し、私とともに死にましょう」。フェレイラは断ったが、岐部の行動は、兄弟の救いを願う司祭の心情をよく表している。その後、岐部神父は活動を東北地方に移し、そこで数年間、活動したが、もはや潜伏は困難であることを悟り、宿主に害が及ばぬよう仙台で捕らえられることにした。

江戸に護送されて取り調べを受け、これには将軍家光が直々に立ち会ったこともあった。さまざまな拷問の末、取り調べ奉行井上筑後守の命により穴吊りにされた。それでも信仰を捨てないペトロ岐部を見た役人は、真っ赤に焼けた鉄棒を彼の腹に押しつけ、絶命させた。ペトロ岐部の処刑について記した井上筑後守直筆の所見が、今も残っている。 「キベヘイトロはコロび申さず候」

主任司祭　ナルチゾ神父

美唄教会　小さな群れ
2022年7月　No.302
2022年6月26日発行

2022年7月　主日ミサ・平日のミサ　予定

今月は、司祭のための祈り

日	曜	ミサ		各種勉強会	会議・その他事項
		主日・祭日	時　間		
1	金		午前10：30	ミサ後　聖書に親しむ	
3	日	年間第14主日	午前11：00		
8	金		午前10：30	ミサ後　聖書に親しむ	
10	日	年間第15主日	午前11：00		運営委員会
15	金		午前10：30	ミサ後　聖書に親しむ	
17	日	年間第16主日	午前11：00		
20	水		午後６：00	ロザリオ会	
22	金		午前10：30	ミサ後　聖書に親しむ	
24	日	年間第17主日	午前11：00		
29	金		午前10：30	ミサ後　聖書に親しむ	
31	日	年間第18主日	午前11：00		

《　平日のミサ　》　**金曜日のみ　午前10：30**　1・8・15・22・29日です
《 聖書を親しむ 》　平日のミサ後、旧約聖書に親しんでみませんか。

霊名の祝日		清掃当番	花　当番
1日ペトロ岐部	菅野　雄太郎	第2週 小川（知） 山本 第4週 船野	船　野
3日トマス	小川　昇		
6日マリアゴレッテイ	岡　由紀子		
11日ベネデクト	河野　二郎		
13日ローザマリア	山本　育子		
16日カルメル山マリア	谷　由美子		
26日アンナ	菅野　まり子・菅野　向日葵 洲之内　京子		

【お知らせ】

◎ 司教様の薦めに従いシノドスについて、皆様から頂いたアンケートに基づいて話し合いを9月頃に行いたいと考えています。

【その他】

私とアカシヤ幼稚園

美唄アカシヤ幼稚園
副園長　長谷川　道　彦

ご縁をいただき、本年4月に当園に着任してから2か月が経過しました。この間、園長先生をはじめ、職員の皆さんに種々ご指導、ご配慮をいただきながら務めてきました。

私は、これまで、公立の義務教育学校（小・中学校）に勤務してきましたので、私立の教育機関、また、幼稚園に勤務するのは初めてのことです。そんな私がこの2か月あまりで学んだことや感じたことを思いつくままに記してみたいと思います。

＜人間として大切な3つの言葉＞

当園では、何かしてもらったときは「ありがとう」、間違ってしまったときは「ごめんなさい」、自分でできないときは「おねがいします」と素直に言えるような子どもたちの育成を目指しています。このことは、幼稚園に通う子どもに限らず、この後、小学生、中学生・・・と成長していっても、身に付けておかなければならない人間として大切なことである思いますし、また、そうした意味で公立、私立の教育機関を問わず、子どもに指導するべきことであると思います。

＜朝の集まり＞

当園では、毎朝、全園児がお遊戯室に集まって、1日の園生活が始まります。朝の集まりは、律動　→　リズム運動　→　祭壇の3本のろうそくの点火　→　朝のお祈り（含聖歌の斉唱）という流れが基本です。

律動では、各クラスのその日の当番の子どもたちがステージに上がってみんなの前で演技をします。子ども1人1人に自己存在感を味わわせる機会になっていると思います。

次の祭壇の3本のろうそくの点火は、上記の「ありがとう」「ごめんなさい」「おねがいします」が毎日の生活で大切なことであり、日々の実践を通して子どもたちに身に付くようにという願いが込められたセレモニーであると思います。そのため、子どもたちには、1本のろうそくが

点火されるごとに拍手をするよう、習慣付けています。

次の朝のお祈りは、キリスト教的な愛を基本とする宗教的雰囲気と適当な環境の中で、人格形成の最も大切な時期にはっきりと正しい道徳観を持つように【お祈り・しんせつ・がまん】をモットーに日常生活の中で大切にしながら、幼児の心身を健やかに育成するという当園の教育目標実現のための大切な活動であると思います。子どもたちは聖歌を歌い、神への感謝の祈りを唱えます。まだ4歳になっていない年少の子どもたちも大きな声で元気よく聖歌を歌い、祈りを唱えることができます。まだ言葉の意味は理解できる段階ではありませんが、まずは、声に出せること、そして、友だちと一緒にやろうする意欲をもてることが大切であると思います。

＜1日の生活の節目に音楽＞

1日の園生活での子どもの気持ちを切り替えるために音楽が使われており、これが高い教育効果を上げていると思います。

朝、全園児が登園するまで、自由遊びをしていますが、その終わりの合図にまず音楽を使います。この音楽が鳴ると、子どもたちはそれまでの遊びをやめて片づけを始めます。

次に、上記の朝の集まりが終わって、各クラスへ移動した後、クラスごとに朝の会を行いますが、ここで「おはようの歌」を歌い、改めて1日の園生活の始まりの心構えをつくります。

次に、昼食時、「お弁当の歌」を歌ってから「いただきます」をします。

そして、帰りの会で「さよならの歌」を歌って1日の生活を終わります。

このように、音楽や歌が、子どもたちの園生活にメリハリやリズムをつくり出しており、幼稚園になくてはならないものであると感じています。

＜結びに＞

1年間過ごしてみないと、いつ、どんなことがあり、そのことによって、子どもがどのように成長していくのかはわかりませんが、今後も、1つ1つのことを学びながら、子どもや職員と一緒に成長していきたいと思います。